

授業実践1の様子		授業実践2の様子		授業実践3の様子	
Aさん	<ul style="list-style-type: none"> 本単元における導入部の進み方から、過去の類似した学習の流れを想起し、単元の全体像をイメージしながら見通しをもって学習に向かう様子が見られた。 教師の説明を聞きながら要点をメモに残し、自分なりに情報を整理していた。最終的に情報を発信することを見通した上で、単元初期の段階から情報をまとめ始めた。 情報収集の場面では、教科書やタブレットを使い分けつつ、机間指導している教師に声を掛けたり、他者と交流したりして学習方法を自己決定しながら活動していた。 単元の流れを意識して学習に取り組むことで、スピード感のある活動を展開する様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 板書された「他の事実とも関連付けて」という部分を意識し、九州地方の災害に着目することで、情報収集から発表までの見通しをもっていた。 活動序盤で他者と交流し、共通点や相違点を明確にしながら自身のプレゼンテーションに生かそうとする姿勢が見られた。 活動が進むにつれて交流は少なくなり、黙々とプレゼンテーションの作成を進めていた。 「火山への対策」をテーマに設定し、自然環境としての火山と防災としての対策を関連付ける意識をもって活動していた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「地域おこし協力隊」という前提を意識して、「火山灰を釉薬として活用する」のようにデメリットをメリットへ昇華する事例を紹介しており、その要素をループリックに照らして自己評価を行っていた。 他者の発表に対してもデメリットとメリットの運動について記述しており、教師の提示した交流の視点を適切に意識しながら交流したことがうかがえた。 他者の発表を受け、「農業（についても）書けばよかつた」というメモを残しており、他者参照や交流によって気付きを得る様子が見られた。 本時の振り返りでは自身のプレゼンテーションについて今後の改善点を記入しており、次回に向けた改善の見通しをもつ様子がうかがえた。 		
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> 教師の話を聞きながら発言や質問の意図をくもうとすることができる、授業の内容を自分なりに解釈して思考を整理している。 教師との関係性が学びの土台として機能しており、質問や困り感を素直に伝えながら学ぶことができる。 笑顔で活動を行うことができており、新たな取組や教師からの問いかけに対して前向きに活動することができる。 	<p style="color: #4f81bd;">子研究もとの関わる①</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の冒頭で学習計画を立てる際、一通り書き終わった後に「自然環境をメインに」と書き足す様子が見られ、パフォーマンス課題を意識しながら活動できるようになった。 「学びのサイクル」として記述した見通しと振り返りは短くまとめられていたが、これまでの学習を生かす旨の文言も見られ、サイクルを回す意識が見られるようになった。 	<p style="color: #4f81bd;">子研究もとの関わる②</p> <ul style="list-style-type: none"> 「学びのサイクル」の積み重ねによって、常に単元のゴールを意識した振り返りを蓄積し、自己の成長をメタ認知する様子が見られるようになった。 教師から単元の冒頭で提示されたパフォーマンス課題やループリック、あるいは本時で示された「交流の視点」が学びに向かう姿勢に作用し、自己の学びを調整しながら取り組むようになった。 		
Bさん	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習から、興味や関心をもったものを、既存の知識から歴史などと関連付けて思考を深めることができた。 学習計画の「九州地方の地形と気候を理解し、2つを関連付けて説明できるようになる。」という記述から、強い主体性がうかがえた。 授業終わりの学習のまとめでは、自分のワークシートと教師の説明を聞き比べながら、補足を書き足す姿が見られた。 地形だけではなく、特産品への意識をもっていた。 パフォーマンス課題を理解し、学習に生かしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「資料はインターネットを使って調べたものを使ってよい」ことを聞き、教師のアドバイスをもらいながらパフォーマンス課題に使える資料を調べ、今後の活動への幅を広げていた。 授業の後半には教科書に使われている図や表を確認し、説明スライドに九州地方と北海道の雨温図を貼付していた。 教師のアドバイスを受け、雨温図を比較して気候と関連付けながら、宮崎県の促成栽培のメリットを導き出す文章を作成していた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自然環境とその他の事象を関連付けて考えてください」という教師の言葉掛けから、以前より多面的に考え、様々な自然環境（地形、気候）を中心にして他の事象（産業など）と関連付けて九州地方の特色をスライドで発表する姿が見られた。 パフォーマンス課題を提示し、事前に単元のゴールを伝えることで、授業の中で何をするのかがわかっているため、計画的かつ主体的に取り組むことができた。 パフォーマンス課題に対するスライドの内容については、教科書の内容を丁寧にまとめ、説明する姿が見られたが、教科書外の事例を説明するまではいかなかつた。 		
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> 学習能力が高く、教師の指示を理解し的確に思考、行動することができる。 教科書の要点を自分なりにまとめて理解することができる。 教師が話し始めると自然と顔を向け指示説明を理解している。 	<p style="color: #4f81bd;">子研究もとの関わる①</p> <ul style="list-style-type: none"> 「学びのサイクル」を積み重ねる中で、九州地方の自然環境からくる特色に気付いたり、様々な例を基にスライドをまとめたりするようになった。 「説明スライドにどのような根拠を用いるべきか」「説得力のある表現とは何か」について振り返り、次の学習につなげようとするようになった。 	<p style="color: #4f81bd;">子研究もとの関わる②</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元全体のゴールが最初に提示されていることで、Bさん自身が学習の見通しをもち、主体的に活動に向かうようになった。 「学びのサイクル」を積み重ねることで、各地方の自然環境から関連する地域的特色を捉え、地理的な見方・考え方を押さえた振り返りになった。 		

	授業実践1の様子	授業実践2の様子	授業実践3の様子
Dさん	<ul style="list-style-type: none"> 教師から提示されたパフォーマンス課題とループブリックについて、丁寧に理解しようとする様子が見られた。 個人の課題を「九州について、気候や地形などを詳しく理解できるように、地図帳を活用する。これまでの学習とも比較する。」と設定し、学習方法について考えながら単元の見通しをもつことができた。 白地図に地形を記入する場面では教科書と地図帳を使って、実際の様子を確認しながら取り組んだ。 振り返りでは、九州の地形について、北海道との比較を基に「火山が多いし、九州の南側には東シナ海や太平洋があることがわかった。火山が噴火したら大変なことになると思うが、ハザードマップを使って避難することができると思う」とまとめ、本時のねらいに正対した活動ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師から配布されたプリントとインターネットの情報を比較しながら、パフォーマンス課題の達成に向けて取り組んだ。始めは自身のテーマ設定に戸惑い、他者と相談しながら考えていたが、方向性が定まってからは個人で黙々と進めていた。 スライド作りについて、これまでの学習で使用したプリントを見返しながら、北海道の動物（魚が多い）と産業（漁業へのつながり）についてまとめていた。 パフォーマンス課題を意識することでレイアウトや見やすさへの意識が高まり、その結果文字や図の工夫に時間を多く取っていた。本時のまとめで時間配分についての省察を行い次時に生かそうとしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題を再度確認し、本時の個人課題を「わかりやすくスライドを作ることができたので、相手が理解しやすいように発表する」と設定した。 交流の視点を意識し、積極的に発表を行っていた。発表については、画面上のスライドショーに書いてある文章を丁寧に読み上げるものであったが、相手の発表を聞く際には、相槌を打つなどして話し手を気遣う様子が見られた。本時のまとめの中で、自身のフォローアップについて振り返る様子も見られた。 発表を振り返り「内容が薄いので、文が長くなりすぎないように注意しながら内容をよくしたい。」と次に向けて具体的に改善の方向をもっていた。
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> 指示を的確に理解し、落ち着いて学習に取り組むことができる。 教師の説明を聞きながら、分からぬところをタブレットで調べるなど、自分に適した方法を選びながら学習を深めることができる。 既習事項を想起し、単元の見通しをもつことができる。 	<p style="text-align: center;">子研究 ど研究 もに の関 わる ①</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時のまとめでは「わかりやすいスライドになるよう工夫した」との反省とともに、「進捗状況を振り返ると、このままでは完成できない」という見立てをもち、これらを踏まえて「次回からは事前にスライドの内容を決めておく」という見通しを立てられるようになった。 振り返りと見通しが相互に関連する学びの自己調整が見られるようになった。 	<p style="text-align: center;">子研究 ど研究 もに の関 わる ②</p> <ul style="list-style-type: none"> 学びを振り返って、次に学ぶべきことについて記述する様子や、学習が定着していない部分についてメタ認知する内容が見られるようになった。 学習内容をまとめる際に、教師のねらいとは違う方向に進んでいく様子が見られるようになった。
Eさん	<ul style="list-style-type: none"> 本時の課題に対して、「地形・気候についての理解を深めるために白地図を利用しながらまとめる」という計画を立てる様子が見られた。 ワークシートを活用してまとめる場面では、教科書を中心に必要な情報を選び、平野や山脈などを色分けしながらまとめることができた。 教師による説明を聞きながら、必要だと思う情報についてワークシート内に追記したり、内容をメモしたりしながら理解を深めようとする意欲が見られた。 振り返りでは、本時で学習した九州地方の内容のみでなく、パフォーマンス課題を意識した北海道地方との比較についての記述も見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題を意識して、「雨温図とウィンタースポーツ」「地形的特徴と食糧生産」のように、自然環境とそれ以外の要素を関連付けていた。 教科書やプリントから引用して考えを深める様子が多く見られた一方で、情報収集にインターネットを用いる様子は見られなかった。 学習課題や計画を意識して、北海道についてのメリットとデメリットを記入することができ、また両者を関連付けて進めようとする姿も見られた。 共同編集を活用した他者参照や意見交流を行い、自らのスライドに反映させていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 他者との交流や共同編集を通して気付いたことを基に、自らの目標や課題を設定する様子が見られた。 気候と観光を中心として自作したプレゼンテーションについて、自ら交流相手を探して発表し合った。 他者のプレゼンテーションをよく見聞きし、積極的に共通点や相違点を探し出そうとする姿勢が見られた。 交流を通して気付いたことをまとめた本時の振り返りでは、他者と比較してスライドの文字量が多いことを記述し、次時の改善に向けた見通しをもつことができた。 ループブリックと照らし合わせた上で自己評価をBと設定し、一定の成果を実感できた様子が見られた。
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題に対して、前向きに取り組むことができる。 個人でもペアでも、それぞれの形態に応じて柔軟かつ積極的に取り組むことができる。 教科書を参考にしながら、課題の解決に向けて自身の考えをもつことができる。 教師の説明に対して、必要だと思う情報をメモしながら聞くことができる。 	<p style="text-align: center;">子研究 ど研究 もに の関 わる ①</p> <ul style="list-style-type: none"> サイクルの記入が速やかになり、見通しや振り返りを前回よりもスムーズに進められるようになった。内容についても、パフォーマンス課題を意識した学び方の振り返りが見られるようになった。 活動の方向性が明確になったため、前回と比較して対話や協働の場面は少なく、個人での活動が多く見られるようになった。 	<p style="text-align: center;">子研究 ど研究 もに の関 わる ②</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の発表に対する評価や、自身の振り返りなどの記述から、ループブリックを常に意識して活動しようとする様子が見られるようになった。 パフォーマンス課題やループブリックの提示によって、単元や本時の見通しをもちつつ、課題解決に向けて学習することができるようになった。

授業実践1の様子		授業実践2の様子		授業実践3の様子	
Fさん	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習計画について、地形や気候などの理解を深めるとともに「自然環境についても説明できるようになりたい」と、プレゼンテーションを意識した長期的な見通しをもって学習に臨む様子が見られた。 九州地方で見られる特徴的な地形として「カルデラ」「シラス台地」を挙げつつ、それらの豊かな自然環境を北海道との共通点として整理した。 白地図への書き込みや、目標設定と次時に向けた課題設定などについて、前単元から学び方が継続していることの成果が見られた。 ワークシートへの記述については、教科書を使って調べたことや気付いたことを丁寧にまとめた様子が見られた。 		<ul style="list-style-type: none"> 学びのサイクルについては速やかに記入することができており、本時の目標、振り返りとともに前向きに書き込む姿が見られた。 自分が選ぶ地方や、何についてのスライドから始めるかなどについて、迷うことなく作業を始める様子が見られた。教師の見本を見ながら作成することで、スムーズに進めることができていた。 スライドの内容としては、地形の特徴と産業などの関わりが浅い実態が見られた。 プリントや資料、教科書などを利用せず、インターネットで収集した情報を基に作成していた。 		<ul style="list-style-type: none"> 前時の振り返りを受けて、本時の学習計画（見通し）は指示が出ると同時に勢いよく入力していた。また、学んだことや次の学習に生かしたいことも、指示と同時に入力できていた。 タブレットのスライドには北海道地方の内容が十分に打ち込まれており、また発表の中ではメリットとデメリットの両方に触れ、パフォーマンス課題を意識した作りとなっていた。 似たプレゼンテーションを作成している他者を探し、積極的に交流した。また交流の際には、相手のプレゼンテーションを聞きながらよかったですや改善すべき点について多くの気付きを書き込んだ。
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> 教師の説明や指示への反応が速い。うなずきながら話を聞く場面もあり、学習に対して前向きな様子が見られる。 パフォーマンス課題についての理解度は不明だが、目の前の活動には懸命に取り組む様子が見られる。 他者と積極的に交流を図る場面が多く、対話を通して前向きに学習している。 	子どもの関わる①	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題の意図についての理解が浅く、特に「学習したことを生かして」「メリットとデメリットの両方を紹介する」という部分については活動への反映が少ないが、教師の見本などを活用して徐々に形ができていくことに達成感を得る姿が見られるようになった。 教師との対話を通じて、適切な資料選びについての見通しをもつことができるようになった。 	子どもの関わる②	<ul style="list-style-type: none"> デメリット（雪を嫌がる人が多い・ヒグマの被害が出ている）を捉え直し、メリット（雪で子どもが喜ぶ・熊牧場などの観光資源化）として紹介することで、パフォーマンス課題に迫る様子が見られるようになった。 ループリックについてよく理解し、自身の作成したスライドに自信をもってプレゼンテーションを発表する様子が見られるようになった。
Gさん	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題の認識について不安が残る様子ではあったが、振り返りの記述の中には次時の学習である気候について書いた内容も見られ、おぼろげながらも見通しをもって取り組むことができた。 白地図に地域の情報を書き込む活動では、教科書を見ながら基本的な情報を書き入れることができており、学習方法を自分で考えて活動していた。 自身の課題を設定した上で、ループリックを意識して活動することができた。 		<ul style="list-style-type: none"> 本時から始まったスライド作りの活動では、速さよりも丁寧さを意識して作っていた。特に、教師が提示した見本を参考にしながら作成することで序盤の作業はスムーズに進んだ。 教師が全体に投げ掛けた「デメリットだけでなく、メリットも書くといいよ」という言葉で思考が進み、作業する手が再び動き出す場面もあった。 		<ul style="list-style-type: none"> 北海道における雪のメリットとデメリットの紹介を通して北海道の魅力をまとめ、パフォーマンス課題を意識したプレゼンテーションを作成することができた。 自己調整を通して自身の学び方を見つめ直す様子とともに、「覚えていなかったことを覚えることができたし、思い付いたことをもっと詳しく知ることができた」と学習の手応えを実感していた。 プレゼンテーションを交流する対象として選んだのは全て自身と同じく北海道地方についてまとめた相手だった。 自ら進んで交流相手を探すよりも、話しやすい相手や誘われた人と交流するなど、やや受動的な様子が見られた。
子どもの実態	<ul style="list-style-type: none"> ウォーミングアップの活動を楽しむ様子や、他者との交流を通して気付きを得る様子が見られた。疑問や不安を素直に表現している。 積極的に挙手や発言を行い、前向きに学習しようとしている。 ワークシートへの記入には複数の色ペンを使い、見やすくまとめようとしている。 	子どもの関わる①	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題への理解が深まり、振り返りでは次時に向けた具体的な行動計画を記述する様子も見られるようになった。 パフォーマンス課題を意識するあまり、スライドのレイアウトや文字の色についての作業が多くなり、肝心の内容についてはなかなか進まない様子も見られるようになった。 	子どもの関わる②	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りの中には「パフォーマンス課題をしてよかったと思う」という記載があり、本単元冒頭から学習への意識が変容した様子が見られるようになった。 ループリックを活用した自己評価の中では、学習方法について一定の成果を感じられた旨の記述があり、メタ認知の深まりが見られるようになった。